

# 日本におけるパプア諸語の研究史の覚書

## Notes on the history of the studies of Papuan languages in Japan

紙村 徹

Toru Kamimura

立教大学アジア地域研究所

Rikkyo University Centre for Asian Area Studies

**Abstract:** The studies of Papuan Languages in Japan were started in the 1970's. Dr. Minoru Goh, the researcher of comparative linguistics and an expert on Artaic Languages, concluded that Artaic Languages were not correlative with Japanese Language on the linguistic system. Then Dr. Goh began to study Usurufan Language, one of the Papuan Languages among the Eastern Highland Province, Papua New Guinea, as the most correlated language with Japanese Language. At last Dr. Goh realized that the languages of Papuan Gulf Area correlated with Proto-Japanese Language not only in phonology, morphology and syntax, but also in vocabulary. Accepting this idea of Dr. Goh, Professor Susumu Ohno, the very famous Japanese philologist, supposed that one of the origins of Japanese Language was the Tamil Languages, and another origin was Papuan Languages. In the 1980's, Osamu Sakiyama, a research fellow of the National Ethnological Museum of Japan and a Linguistic Anthropologist, studied that the word order of Austronesian Languages—(for example Hiri Motu language), changed to that similar with Papuan Languages and exerted great influences on those languages. Since the 2000's, young researchers of Papuan Languages such as Associate Professor Masayuki Ohnishi and Syuntaro Chida, proceed to study some Papuan Languages, Dom Language of Simbu Province and Nacoi Language of Southern Bougainville Island.

**Key words:** Papuan Languages, Origin of Japanese Language, Austronesian Languages

### 1. はじめに

日本におけるパプア諸語の研究史を概説することが、本誌編集者から筆者に課された課題である。この課題は、筆者にとってはかなりハードなものである。なぜなら筆者は言語研究の専門家ではないからだ。筆者はあくまでも文化人類学専攻であり、たまたま比較的長くパプアニューギニアでフィールドワークを繰り返してきた経験があるにすぎない。若い頃にパプアニューギニア中央高地のエンガ州で調査をしたことがあり、その成果のひとつとしてエンガ語についてのエッセイを、大修館書店版『月刊言語』1989、vol.18 等に行ったことがあった。さらに三省堂版『世界言語学大辞典』第五巻（1993年初版）にもエンガ語について概略を紹介した。文化人類学者風情が、エンガ語について他の世界の言語学専門家に列して臆面もなく概説するなぞ厚顔の至りではあったが、おそらくは編集者は日本では他にほとんどパプア諸語につ

いて書ける専門家を発見できなかった事情があったからであろう。この点から1970年代までは、日本におけるパプア諸語の研究はまったく遅れていたことが判明する。だいたいからして、この頃は外国語大学の先生方であってもパプア諸語についての認識というかイメージはずいぶんと貧相なものであった。筆者の学生時代であった1970年前後では、外国語大学の先生方は「パプア語」と言明していたものだった。実際にはニューギニア島に「パプア語」などという言語が存在していたことなどなかったのだ。ドイツ語、ロシア語などではあっても、ともかく言語の専門家がこのような認識であったほどに、パプア諸語についての「常識」が、日本においてはいかにこの当時遅れていたかが推測できるというものであろう。

## 2. パプア諸語について

「パプア諸語」という表現が日本において定着し始めたのは、1970年以降ではなかっただろうか。遺憾ながらこの「パプア諸語」という表現を使い始めた人がどなたであったのか、筆者は寡聞にして知らない。おそらくはこれを最初に唱えた人物こそが、日本におけるパプア諸語研究のパイオニアであったのではないだろうか。

「パプア」という語については、通俗的な旅行案内書などに、シンガポールあたりに交易のために出てきていた縮れ毛の黒い皮膚の人々を指して、マレー語の縮れ毛を指示する「パプア」と呼んだことに由来すると書いてある。しかし筆者はマレー語で縮れ毛を「パプア」と実際に表現するのかどうか確認していない。

ここで「パプア諸語」と通称している諸言語は、いわゆるアルタイ諸語とかオーストロネシア諸語と呼び慣わしている諸言語とはその意味合いが異なる。アルタイ諸語、オーストロネシア諸語はその下位言語が相互に系統的に関連があるとされているのに対して、パプア諸語についてはその下位言語が相互に系統的に関連があるとはいまだ確認されているとは言い難いのである。いや、言い難いどころか、まったく系統的にバラバラとも思われる諸言語、750言語とも2000言語以上とも言われているが、それら諸言語が一括されてパプア諸語と呼ばれているにすぎないのだ。そのためにオーストラリアのオセアニア圏の諸言語の研究、これを「オセアニア言語学」と呼んでいるが、この研究者たちはパプア諸語をNAN、つまりNon-Austronesian非オーストロネシア諸語の略語だが、と呼ぶようにしようと提案している (A. Capell, 1972)。この考え方は、オセアニア圏の諸言語が大きく言って二つのグループに便宜的に分けられることに依っている。すなわち言語分布圏としてはあまりにも広大な海域を占めているオーストロネシア諸語 (AN) が、西はアフリカ近くのマダガスカル、そしてインドネシア、マレーシア、フィリピンなどの東南アジア島嶼海域、北は台湾山地、東はミクロネシア、メラネシア、ポリネシア、南はニュージーランドやチャタム諸島まで分布している。これに対して、オーストロネシ

ア諸語以外の諸言語がニューギニア、ニューブリテン、ブーゲンヴィル、サンタ・クルスなどメラネシア各地、そしてオーストラリア先住民アボリジニの諸言語が、オーストロネシア諸言語に囲い込まれるように分布していて、これらを非オーストロネシア諸言語（NAN）と一括しているのである。NANのうち、オーストラリア・アボリジニの諸言語を除外したカテゴリーが、パプア諸語ということになる。

こうしてみると、NANのうちオーストラリア・アボリジニ諸言語以外の諸言語をパプア諸語と称しているにすぎないため、パプア諸語の下位言語が相互に系統的に関連があることは、まったく前提されていないことになる。オーストロネシア諸語に含まれないその他大勢をパプア諸語と仮にまとめているにすぎないのだ。縮れ毛の意味だとするパプアの語彙はややもすれば差別用語とも看做されかねないが、現在はパプアニューギニアと正式の国名に使われているのだから、われわれは一応便宜的にパプア諸語の用語を使ってもさしつかえないだろう。

### 3. 日本語起源論と取り組んだ日本のパプア諸語研究のパイオニアたち

筆者の知る限り、日本におけるパプア諸語研究のパイオニアは、おそらく比較言語学者でアルタイ諸語研究の泰斗であった江実（ごう みのる）博士であろうか。ごく一般的にみて、日本において比較言語学を専攻する研究者は、難問中の難問の代表格たる日本語の系統、ひいては日本語の起源にことに大きな関心を持ち続けてきたようだ。そうした事情は研究者である以前に、日本人であること、自らは何者であるのかといった根源的な存在への問いかけに動機づけられ根付いていたのであろう。ことに比較言語学の分野においては、日本語がいまだ系統のはっきりしない、ひょっとしたら孤立言語に近いかもしれないとみなされているのだから、いわば世界の言語地図のなかの行方不明児であり、孤児であるかもしれないといった状況は、とてもわれわれ日本人にとって「存在の不安」とらわれざるをえない。こうして日本語の系統論に由来する日本語の祖形の探究、そしてその果てに日本語の起源の探究へと向かっていくことになる。江実もまたそのような研究者の系譜に連なっているようだ。国語学者大野晋の紹介文によれば、江実は元来はアルタイ諸語の専門家で、半世紀にわたってモンゴル語、トルコ語、朝鮮語を研究してきたが、アルタイ諸語と日本語との間には語彙の上では系統的関連はないと結論した。そして晩年になって日本語と音韻論的、形態論的、そして統辞論的にもきわめて類似するいくつかのパプア諸語の研究に向かったという（大野晋 1980b）。ことに1980年頃には、江実のパプアニューギニア南部パプア湾地方の諸言語が、音韻論的、形態論的、統辞論的のみならず、大野晋との共同研究の結果、語彙の上でも日本語の祖形と関連があると結論するに至った。すなわちパプア湾地方の言語と祖日本語とが系統的に関連があるということである。江実はこの結論はもはや疑いがないとまで言っている（江実 1980：199）。

パプア諸語が日本語と、音韻、形態、語順などの特徴が近似することは、筆者もまた言語学の門外漢ではありながらも、現地のフィールドワークのなかで常日頃から実感してきたところである。現地で語彙を拾って、それら語彙を頭の中にある日本語の調子で並べて行けば、なんとか意思が疎通するからである。筆者は特に若い頃に中央高地のエンガ族の間で調査していた際によく実感したものだ。1970年代後半から1980年代半ばにかけてだった。当時のエンガ族の人々は、ほとんどトク・ピシン語（パプアニューギニアの公用語のひとつで、現在ではほとんどパプアニューギニアの「国語」の位置を占めつつある）を使っておらず、日常生活はエンガ語のみであったため、調査上必然的にエンガ語をマスターせざるをえなかったのだ。これらパプア諸語の特徴の束について、江実以下のようにまとめている（江実 1980：140-142）：

### 1) 音韻構造

語頭位音は二重子音がない。またR音、ŋ音でも始まらない。

語末位音はすべて母音で終わる。

### 2) 統辞構造

主語—目的語—述語の語順。

強調辞は語詞に後置する。

属格や与格を作る場合は、語詞に助辞を後置する。

属格の前置。

形容詞の前置。

### 3) 形態構造

直接法、命令法、否定法、仮定法は、動詞語根に接尾辞として後置する。

過去時称、未来時称、完了時称は、動詞語根に後置する。

以上の特徴の束は確かに日本語ときわめてよく似ているとってよかろう。筆者のような言語学の門外漢にとっては、これだけ似ていたらもうこれだけで両言語の系統的関連は論証できるのではないかと思ってしまうのだが、やはり比較言語学の専門家にとってはこれでは系統的関連を論証しえたとはみなされならしい。比較言語学においては二つの言語の系統的関連を論証するためには、特に基礎語彙100とか200とかが相当なパーセンテージで類似することによりも重視されているからだ。確かにわれわれが言語を習得する場合には、まずは生活に必要な語彙を覚え込んで、それら覚え込んだ語彙を次々と並べ立てて、なんとか文を構成しようとするはずだ。共通の語彙があれば、なんとか相手にまがりなりにも自らの意思を伝えることはある程度可能だ。つまり固有の独立の言語とは、まず何と言っても語彙の共有にあるとさえ言えるだろう。そうであればこそ、比較言語学者が複数の言語の系統上の繋がりを指摘する場

合に、ことに語彙の共通性ないし語彙の祖形の強い関連性を強調するのだ。言語は祖形が同一でも、時の流れや空間的に隔絶していると、相互に徐々に変形していくことはよく知られている。語彙の祖形を再構成する作業を介して、初めて両言語の系統上の関連性、親戚性が指摘できることになるというわけだ。

パプア諸語と日本語との系統的関連性が強いとの江実の仮説もまた、主に批判されたのも以上の語彙の問題に集中した。共同研究を行った大野晋もまた、早くからこの問題点を指摘していた。アルタイ諸語を半世紀以上も研究してきた江実であれば、自らの仮説設定についてはきわめて慎重であったし、当然ながらこうした問題点は気づいていた。しかしパプア諸語においては、音韻法則の一致、形態素の一致、語順の同一性といった共通性があるにもかかわらず、語彙レベルでは各言語相互に極端に異なっている。A. Capellはパプアニューギニア国内のNAN諸言語を語彙統計学の方法によって語彙の比較からおおよそ13ないし14のグループに分けている。CapellはこのグループをLanguage Family（語族）と呼んでいるが、インド＝ヨーロッパ語族と言う場合の「語族」とは同一の概念であるとはしておらず、一応のパプア諸語の便宜的類別に留めている（A. Capell, 1972: 615）。これほどの多様な語彙状況から、日本語との系統的関連を見出すことは至難の技であろう。

ところが1980年論文において、江実はついにパプア湾沿岸の諸言語と上代日本語とが、基礎語彙において相当程度の相関性が認められると結論している。ただし上代日本語の基礎語彙との相関性を判定したのは大野晋である。ここで江実が主張する上代日本語とパプア湾沿岸諸言語との基礎語彙の相関性の強度という仮説が妥当なのか否かについては、筆者にはまったく見当がつかない。門外漢の悲しさであろうか。それでも、上代日本語の「黒」を意味するkurosiが、パプア湾岸キワイ語系のkirikiriと対応するとする。上代日本語の「尾」woは、キワイ語系のwapoと対応し、上代日本語の「歩」ayumuは、キワイ語系のaraoと対応するとされる。また上代日本語の「女」meは、キコリ語系のmama, mamie, ammaと対応する。上代日本語の「水」miduは、キコリ語系のmuと対応するとされる（江実 1980: 196）。筆者にはこれらの対応が、世界の他の語彙よりはるかに相関しているとはほとんど判断できないのだ。たぶん筆者があまりに素人すぎるということだろう。

一言付加すれば、江実が「パプア湾沿岸の諸言語」と位置付けている諸言語には、東部高地南部縁辺域のアンガ語系統や南部高地縁辺域のダリビ語、パワイア語、ポロパ語、そしてボサビ山麓のカルリ語、オナバスル語、ストリックランド上流域、クトゥブ湖のファス語なども含まれている。これらの諸言語を「パプア湾沿岸の諸言語」と括るのはいささか疑問である。むしろ「パプアニューギニア南部のパプア地区」、つまり独立前のオーストラリア領パプア地区の諸言語としておいた方が誤解がないだろう。筆者が上記に挙げた諸言語はきわめて少数派人口の言語であり、かつほとんどその系統はわかっていない。これらをパプア湾岸のキワイ語や

キコリ語などと同列に置いて比較することは、現状ではあまりに問題がありすぎるのだ。

したがって江実作成の基礎語彙対照表(二)(江実1980:196)のうち、正確に「パプア湾沿岸諸語」とみなせるキコリ系やキワイ系の言語に属する語彙だけを取り出すと、「黒」「尾」「歩」「水」「女」の5つの語彙のみとなる。5つだけの語彙が対応するからと言って、上代日本語とパプア湾沿岸諸語とが語彙の上で相関性が高いと判定するのはいかなるものであろうか。こんな程度なら、オーストロネシア語族セブアノ語で「臍」puso、「犬」iru、「陰莖」tintinは、それぞれ上代日本語のfozo, 現代日本語のinu, chinchinと相関するとだと言って言えることになるだろう。やはりパプア諸語と上代日本語との系統論的関連は、いまだ論証することは困難だということであろう。

以上のような若干の問題点はあるにしても、江実による「パプア湾沿岸諸語」と上代日本語との比較対照は、700以上もあると言われるパプア諸語のなかでことさらに南部のパプア地区の諸言語を選択した点で、なかなか戦略上優れていたと思われる。なぜなら筆者がこの30年以上調査を行ってきた北部地区、独立前の国連委任統治領北部ニューギニアの諸言語を選択したとすると、そこではオーストロネシア諸語が各地沿岸部に分布していて、パプア諸語も大いにオーストロネシア諸語の影響を受けてきたために、これではパプア諸語の祖形を再構成する作業は相当な困難が見込まれるからである。北部ニューギニア地区に対比すると、南部のパプア地区は、ほとんどオーストロネシア諸語の影響が及んでいなかったため、より純粋のパプア諸語が残っていると、おそらく江実は予想されたのではないか。

江実の比較言語学上の最終目標は、「日本の「原」語ともいべき言語(群)は、インド(等)のアジアに存在していて、このセンターからこの原語は一方では南下し、パプア・ニューギニアに至り、他方では北をまわり日本に至り、驚くようにながらくここにとどまっている」(江実 1980:216)ことを立証することだった。この着想はほぼこのまま共同研究者である大野晋に受け継がれていく。大野晋は抜群の知名度を梃にして、江実の最終仮説を当時の一般社会に普及させていった。さらに、江実は日本語の原語が印度にあり、そこがその後の拡散のセンターとなったと仮定したが、大野晋はそれを南インドのドラヴィダ語系のタミール語に想定し、タミール語研究に進んで行った(大野晋 1987)。大野晋自身は、1987年以降はもはや日本語とパプア諸語との系統的相関を大きく取り上げることはなくなっていたが、1974年の『日本語をさかのぼる』(岩波新書)では、210頁から212頁で江実によるパプア諸語の一つの「ウサルファ語」の分析を取り上げている。大野によれば、ウサルファ語は、音韻構造・統辞構造において日本語ときわめて類似する体系であるとし、インドネシア語を日本語の南島祖語とみなす提言よりもはるかに類似性は高いと示唆する。他方で大野は、ウサルファ語の語彙がまったく日本語とは相関しないことを挙げ、「タブーの観念が盛んなため、たとえば王様の死去に伴い、王様の名前と同音で始まる語はすべてタブーとなって、別の語に言い換えをす

るなどのことがあって、語彙の変化が急速で、定着しないという事情もあるらしい」(大野晋 1974: 212-213) と述べている。しかしウサルファ族(正しくはウスルファ族)には王様などは存在していない。おそらくはビッグマンを指しているのだろうが、ビッグマンの死去に伴い、彼の名前と同音の語がすべてタブーになるなどという慣習など、筆者は聞いたことがない。確かに死者の名前を死者の息子たちが、特に夜間に発話することが禁忌となることはあった。また死者が息子の名前を熟知しているので、亡父からの災厄を回避するべく、死者の息子たちは彼の母方オジから別の名前を贈与されて使用することになる。最近では日常的にクリスチャン・ネームをもっぱら使い、上記の禁忌を回避するようになっている。これこそキリスト教の恩寵というものだ。これらは亡父と存命の息子たちとの関係においてのみ機能している。死者の名前と同音の語がすべて民族集団の成員すべてにタブーとなるなど、まずありえない。大野晋は、なぜこんな危うい仮説を提示したのであろうか。

どうやら大野晋は、江実の次の説明を受けたのであろう。すなわち江実は語彙が言語毎に無限に異なっていること、そして今もなお語彙が迅速かつ徹底的にかわる可能性があることの原因は、Word Tabooがあることによると言い、「原住民が死にますと、その人の名前がタブーになるということです。そして元来、人の名前は、一般の事物の名前を利用して命名されますので、この死者の名前がタブーになるということは、同時にその一般の名前もタブーになるということになるのでしょうか。そして、その一般の事物も新しい名称がつけられなければなりません。その新しい名前は他の言語から借りることが多い。こうした過程をおたがいに繰り返しているのですから、そこから生じてくるのは無限混沌、無限の語彙の違いということになる」(江実 1974: 302-303) としている。江実は、これをオーストラリア・アボリジニの慣習として明確に実証されていると言い、おそらくパプアニューギニアにもこれと同様の慣習があったのではないかと示唆しているのだ。しかし出典が明らかではないが、オーストラリア・アボリジニに死者の名前がタブーになるということはありえるが、それにもかかわらず死者の名前と同一の一般の事物の名称もタブーになるという点は、江実の思弁であろう。慎重な比較言語学者江実にしては、いささか強引な、しかしいかにもありそうにない思弁を弄したようだ。

結局のところ、パプア諸語と原日本語との間の系統的相関性は証明困難なままとどまっているわけである。しかしながら、もしそうした相関性が認められなくなったなら、孤立言語ともみなされがちな日本語話者であるわれわれ日本人研究者が、パプア諸語などという世界の辺境に位置する不思議な言語を研究する内的動機はいったいいかなるものであるのだろうか。なにがパプア諸語の研究に駆りたてさせるのだろうか。考えられる動機付けは、日本人研究者という枠組みを相対化し取り払い、西欧起源の比較言語学の普遍的研究関心に同調させる行き方であろうか。

#### 4. 1980年代以降の日本のパプア諸語研究者たち

言語は確かに人文諸科学のなかでもっとも客観性が高い、つまり文化・社会の脈絡から比較的分離しやすい特性をもっているのだから、研究者が自らの出身文化の基盤と無縁に研究を進めうる分野である。日本におけるパプア諸語の研究は、1980年代以降ほとんどこの流れのなかにあるといえよう。オーストラリアなどの世界のパプア諸語の研究においても、いまだその言語系統を明確化できる研究段階にはないのだから、現在のところ日本人研究者であっても無限に近いとも感じられるパプア諸語の地域言語の基礎資料を収集することから始めざるを得ないのである。

主にオセアニア圏を研究対象として、互いに異なる言語が接触し、相互に影響し合う様相、そうした異なる言語の相互接触からしばしば生まれるピジン語化現象に関心を持ち続けた研究者の一人が、長く国立民族学博物館で活躍した崎山理であった。ことに崎山は、パプア諸語と接触し変形したオーストロネシア諸語に関心があったらしい。そのためか崎山には、パプア諸語に直接研究者として踏み込み調査研究するという構えが比較的少なかったようだ。パプア諸語の顕著な特徴である異様なほどの語彙のレベルにおける多言語状況についても、崎山はわずかに、言語的差異を際立たせることによって内集団と外集団とを区別するという、言語の紋章的機能を指摘した、George W. Grace (1984) の所説を紹介するにとどまっている。2年間ほどパプアニューギニアの首都ポートモレスビーに滞在した崎山は、ここの近くに住むオーストロネシアンのヒリモトゥ語系の人々の言語状況を調査し、「ヒリモトゥ語の類型——辞順と後置詞」という論文を発表しているが、これは元来オーストロネシア諸語に属するヒリモトゥ語が、ポートモレスビー周辺のパプア諸語と接触し影響を受けた結果、パプア諸語の統辞構造と形態構造を受容し変容した現象を分析したものである(崎山 1994)。崎山の中心的関心は、パプア諸語よりもオーストロネシア諸語自体にあったのだ。ソロモン諸島の諸言語についても、ほとんどオーストロネシア諸語の分析に集中していて、ナシオイ語やブイン語などのパプア諸語については、その内容にほとんど立ち入っていない(崎山 1996)。また崎山は1984年から1985年にかけて、ニューアイルランド島のクオット語、ニューブリテン島のタウリル語、イリアン・ジャヤのスコ語などのパプア諸語も調査している(崎山 1993)。このようにパプア諸語の研究は、現状ではともかく基礎調査を積み重ねることに尽きるのである。

オーストラリアのオセアニア言語学研究者たち、S.A. Wurm, A. Capellなどは、パプア諸語を主に語彙統計学的分析手法によって、とりあえず分類というか仕分けしたのだが、そこで使用されたLanguage Phylum, Language Stock, Language Familyなどのグルーピングを提示している。これらを日本語に訳す際に、崎山はそれぞれ「語門」「語系」「語科」を当て、ことに比較言語学で言うLanguage Familyの日本語訳「語族」と区別することを提案している(崎



山 1999)。この崎山の主張はけだし卓見であろう。

2000年代以降は、若手の研究者たちがパプア諸語に属する地域言語の地道な基礎調査を続けている。総合地球環境学研究所の大西正幸、元熊本大学の千田俊太郎などである。かれらは共同研究プロジェクトとして、パプア諸語に属する南ブーゲンヴィル諸語および東シンブー諸語という地域言語の基礎調査を継続中である。東シンブー諸語は、パプアニューギニア中央高地シンブー州（チンブー）のクンディアワ南方のチンブー語科ドム語を中心に基礎調査をしているらしい。ドム語の下位分類を仮説的に提示できる段階にあるようだ。

以上のように、日本におけるパプア諸語の研究は、現在のところもっぱら地域言語の基礎調査を継続していることに尽きるであろう。またそういう行き方こそが、オーストラリアなど世界のパプア諸語研究の現状に同調しつつ、パプア諸語という系統が未知の諸言語の研究をいっそう進めるためのもっとも着実な姿勢であろう。

### 【参考文献】

ここではすべて日本での成果業績をリストアップすることは、紙幅の関係でできない。主なもののみ挙げる。

大野晋

- 1974 『日本語をさかのぼる』岩波新書
- 1980a 『日本語の世界1 日本語の成立』中央公論社
- 1980b 「解説 パプア語と日本語との比較研究」至文堂
- 1987 『日本語以前』岩波新書

江実

- 1978 「日本語はどこから来たか——北と南から見た日本語——」大野晋・祖父江孝編 『現代のエスプリ臨時増刊 日本人の原点』第1号「形質・考古・神話・言語所収、至文堂
- 1980 「パプア語と日本語との比較研究——基礎語彙による」大野晋編 『現代のエスプリ別冊 日本語の系統』至文堂

崎山理

- 1993 「オセアニアの言語的世界」大塚柳太郎・片山一道・印東道子編 『オセアニア1 島嶼に生きる』所収、東京大学出版会

- 1994 「ヒリモトゥ語の類型——辞順と後置詞」『国立民族学博物館研究報告』19(1)：1-17所収
- 1996 「複合的な言語状況」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌 文化・歴史・社会』第2章所収、明石書店
- 1999 「オセアニアの言語の系統とその特徴」『月刊 言語』vol. 28 no. 7「特集 オセアニアの言語と文化」所収、大修館書店

## 紙村徹

- 1989 「連載 エンガ語のすすめ1 パプア諸語のなかのエンガ語」『月刊 言語』vol. 18 no. 5, 大修館書店
- 1989 「連載 エンガ語のすすめ2 エンガ的世界と言葉の共有」『月刊 言語』vol. 18 no. 6
- 1989 「連載 エンガ語のすすめ3 文法の輪郭」『月刊 言語』vol. 18 no. 7
- 1989 「連載 エンガ語のすすめ4 動詞体系と文のパターン」『月刊 言語』vol. 18 no. 8
- 1989 「連載 エンガ語のすすめ5 挨拶ことば」『月刊 言語』vol. 18 no. 9
- 1989 「連載 エンガ語のすすめ6 愛を語る比喩表現」『月刊 言語』vol. 18 no. 10
- 1993 「エンガ語」『三省堂 世界言語学大辞典』第5巻 [補遺]：44-51, 三省堂

- A. Capell 1932-33 The Structure of Oceanic Languages. *OCEANIA* vol. 3  
1972 Languages. IN: *Encyclopaedia of Papua New Guinea*, vol. 2 : 610-617. Melbourne University Press.
- S.A. Wurm 1964 Australian New Guinea Highlands Languages and the Distribution of their Typological Features. *American Anthropologist*, vol. 66, Special Publication.  
1965 Recent Comparative and Typological Studies in Papuan Languages in Australian New Guinea. *LINGUA* vol. 15.

## 大西正幸

- 2011 「ナーシオイ語民話テキスト」『地球研言語記述論集3』：209-243. 総合地球環境学研究所

## 千田俊太郎

- 2011 「東シンプー諸語サブグループピングに向けて」『地球研言語記述論集3』：153-182. 総合地球環境学研究所
- 2013 「ドム語第二ドム方言」『ありあけ 熊本大学言語学論集』12：1-13.